

◆連載

いま留萌をかし

●みなと留萌の誕生

留萌港は今年で開港五十周年を迎える。また、築港工事の始った年（明治四十三年）から数えると七十七年、人間でいえば喜寿を迎えたということが出来る。

明治二十年（一八八七）、一人の英国人が全道の海岸を調査して歩いた。当然、当時まだわずかに定住者が三百人程の一寒村だった留萌も通過した。彼の調査の目的は、北海道の開拓のために不可欠な港湾建設の候補地を選定することであった。

彼の名はC・S・メーク、北海道の開拓のために北海道庁が招いた外国人技術者の一人であった。しかも、数多くの招聘外国人の中でも、彼の提言が後の留萌の進むべき道を決めることとなろうとは、この時考えるものもいなかった。

彼は全道の港湾調査の報告書の中で次のように述べた。

「天塩沿岸では、増毛より留萌はまだ未発達だが、もしも百二十万円をかけて留萌の海岸を修築すれば良い港になるであろう」。

この一文が、道北の一寒村にすぎなかった留萌の人々に大きな野望をいだかせることとなったのである。そして、いつしか留萌町民の悲願にまで昇華していった。

明治二十四年（一八九二）留萌の地元有志数十名は、まだできてのホヤホヤだった大日本帝国議会に留萌築港の請願を行った。有志五十嵐綱治、長尾甲齋、伊山徳次郎（留萌村戸長）、倉光吉郎は、十二月二十二日東京に着き、翌年の一月九日まで滞在し、各方面へ請願を行っている。

しかし、この第二帝国議会は十二月二十五日、海軍予算の大幅削減が可決されたため、紛糾し、政府は我が国の議会上初めての解散を行った。

このため、第一回の請願は水泡に帰したのである。

ただ特筆されることは、大日本帝国憲法が制定されてまだ二年、北海道議会等の地方議会制度も整っていないかった明治二十四年であって、中央の議会へ請願を行った事実である。北海道の一寒村にすぎない留萌に住んでいた人たちの政治的進取性と実行力にはただ敬服するのみである。

明治三十三年（一九〇〇）留萌築港鉄道期成同盟会が組織され、第二回目の請願がなされた。第一回の請願から八年目のことであった。これには一回目の請願の内容に鉄道敷設が加わった。八年間の留萌づくりビジョンの拡大が読みとれる。

鉄道敷設は明治三十八年（一九〇五）第二十二帝国議会で留萌深川間が第一期線に編入され、明治四十三年（一九一〇）に完成した。築港は、

その年の第二十六帝国議会で採択され、春から年願の工事に着工したのである。

C・S・メークの調査から

二十年、留萌は、戸数八三七戸、人口三九四二人を数えるまでになっていた。



築港前の留萌川河口

●特集あらゆる機会を逃さず足を運ぶ

昭和62年7月／発行・留萌市編集・総務部秘書企画課印刷・株式会社留萌新聞社

1987